

新潟市立光晴中学校



学校データ

【学級数】

14学級

【生徒数】

358人

【地域コーディネーター
の有無】

有

災害時でも活かせる生きる力の育成 ～ 食と防災を中核としたサステナビリティ

1 はじめに

旧豊栄市の中心部に位置し、新潟市や新発田市のベッドタウンとしての地域と農村部が広がる地域がある。両地域においても日中は、労働世代不在の家庭が多く、地域において中学生へ活躍の期待が高まっている。しかしながら、生徒は地域における自分達の存在意義を自覚しておらず、地域からの要望と中学の認識に乖離が生じている実態がある。

そこで、今回新潟市の食育の推進の指定を受けたことを機会に、これまでの地域との活動を「食と防災」の観点から再構成し、取り組むこととした。

本取組のねらいは、次の2点である。

(1) 保護者・地域の方々、企業、行政とともに食及び防災について考える活動を通し、避難所が開設された場合、小学生、中学生の動きを知る。

(2) 共に避難所体験をすることにより「自治」への意識を高める。

2 取組の実際

(1) 食育ミニフォーラム当日の取組

[参加者：光晴中学校生徒・教職員、豊栄南小学校児童、地域の方、北区役所地域総務課、医療福祉大学、ふるさと未来創造堂]



①グループ活動

児童、生徒、地域の人で1グループをつくり「避難所の食事について不安なこと」をグループに割り当てられた立場で考え、全体でシェアリングした。

②専門家の話をみんなで聞く

NPO 法人ふるさと未来創造堂、中野雅嗣さんから、震災時の避難所の様子、避難所で活躍する小中学生について話を聞き、①グループ活動で出した意見・質問の回答を得た。

③防災給食喫食体験

当校体育館、グループごとに段ボール紙を敷いた場所で、防災給食（北区の備蓄食品を使用した内容）を喫食した。配膳は避難所を想定し、中学生が行った。



3 成果と課題

及び本実践で育成された資質・能力

【参加者の声】

・いざというときに、自分たちが頼りにされていることが分かった。もし避難所で活動する場合は、率先して動けるようにしたい。(中3)

・避難所において効率よく、みんなに食事が行き渡るようにするためには、工夫が必要だということが分かった。地域の人たちと協力してやっていくことが大切だと分かった。(中1)

・非常に有意義な時間でした。有事の際は中学生の力が必要です。(自治会長)

・グループワークでは、リーダーが積極的に活動していた。今後も地域との繋がりを続けてほしいと感じました。(自治会長)

・中学生と一緒に考え合うことができ、よい経験となりました。感謝します。(民生委員)

◆活動の成果

(1) 地域と共に行う防災学習から

共に活動することを通して、顔の見える関係性が構築・強化された。さらに、様々な立場の人と一緒に考えることで互いの役割や期待を認識することができ、自己有用感の高まりに繋がった。

(2) 学・社・民の融合の視点から

中学校が起点となり、自治会、地元企

業や行政、大学とも連携した。「食と防災」の窓を通して、異業種間での情報を共有し、活動内容の充実・深化を図り、win-win の関係を構築することができた。地域教育コーディネーターの尽力があったことは言うまでもない。

(3) 生徒の資質・能力から

様々なグループ活動を組織していく中で、生徒が主体的に対話を進めていく場面が随所に見られた。そして、思考を深めていた。これらは、生徒の活動記録から読み取れる。また、様々な立場の人との交流を通して、物事を多面的・多角的に見て考える様相もあった。さらに新たな課題を持つ姿もあり、「主体的で対話的な深い学び」が具現化されていた。

4 おわりに

紹介した取組は、昨年度（指定1年次）の取組である。今年度はコロナ禍により、地域との交流には制限を設けている。しかしながら、このような状況だからこそ、インターネット回線を活用し、地元地域を超えた人やもの、こととの交流を進めることができた。

地域の概念が地元に残っている実態があるが、中学校段階においては、地元で考え、体験することを踏まえ、地元に残らず、次のステップに進むことが必要なのではないかと感じた。

活動の内容には、小学校の取組と重複するものも少なくない。発達の段階に応じて、行動範囲が広がることを前提に、どこの地であっても汎用性のあることは何かを今後も探していきたい。

